

第4回環境大学・環境学習円卓会議(要旨) 報告書

【日 付】	平成23年12月13日(火)
【場 所】	秋葉会館3階会議室
【出 席 者】	《委員》 1 環不知火プランニング 吉永 利夫 2 相思社 遠藤 邦夫 3 水俣自然学校 三村 堅一 4 みなまた環境塾 濱田 裕史 5 市民公募 清水 晶夫 6 市民公募 井上 章久 7 環境モデル都市推進課 岩下 一弘 8 " 坂本 愛 9企画課 一期崎 充 《有識者》 ・熊本大学 田中 昭雄 ・崇城大学 永松 俊雄 《オブザーバー》 ・国立水俣病総合研究センター 佐藤 克子 ・環境省 富田 茉莉 《事務局》 ・水俣市企画課 川野・坂本・竹下 ・三菱総研 福田・多田
【資 料】	①円卓会議の検討内容に対する主な指摘事項……資料1 ②第4回環境大学・環境学習円卓会議検討資料……資料2 ③これまでの大学訪問を通じて気づいたこと……資料3
【内 容】 1 これまでの経過報告 ① 大学訪問及び第2回合同会議(12/11)の結果について(川野課長説明) 資料1に基づき説明 ② 環境教育講演会(12/6)の報告について(竹下報告) パワーポイントにて説明 ・メガロポリス型からリヴィエラ型へのパラダイムシフトの加速 →経済と環境の共生 ・環境系高等教育の特性 →県内10大学の環境系の学部、学科、授業カリキュラム等について ●環境立県・環境先進県が具備すべき高等教育機関の4つの要件 ①公害時代を認識する環境教育②自然の保護、保存、保全に資する教育③環境共生と環境再生の計画に挑戦する教育④環境の外部経済を踏まえた環境デザインを担う教育 →『動機づけから自信づけ』 ・冠に環境がつく学科等があふれているので、どこかに集約しなければならないのか。	

③ これまでの大学訪問を通じて気づいたこと（遠藤、吉永報告）

- ・水俣では難しいのではないかと。しかし、個人的に手伝ってくれる先生もいる。
- ・研究フィールドとしての水俣の魅力は多くの人が認めている。
- ・大学を造るための基本的事項の確認が必要
- ・造る背景として → 定住・雇用がある
- ヒアリング結果は厳しいものと感じた。
水俣連携大学院は難しく、またその中間を埋めるものが見当たらない。
厳しい経営の大学が多い中で、新しい大学を造るには厳しい。
就職先が無いことに対して起業する者を育成することも考えられる。
ただの大学院では、地元は眺めているだけ → 地域全体でつくるものが良い。

2 新コンセプト(案)について……資料2

川野課長説明

これまでの大学訪問、第2回合同大学での意見を受けて、事務局で再度検討し、別紙資料2のとおりまとめた。

新コンセプト→水俣の地域活性化、市民利益、就業先、卒業後は水俣で学んだ理論と実践を重視すれば何か見えてくるのではないかと。

再度内容を整理 → 「実学」を研究テーマとして取り扱う高等教育・研究機関を造るべきではないか。→ 専門職大学院

→ 他の円卓会議の取り組みも支援する機関

↓

今後は、「実学」の中身を具体化していく

↓

高等教育・研究機関の設置の実現可能性を検証していく

連携大学院に向けての「第一歩」

- ①学会等の誘致 ②水俣をフィールドとした研究の誘致 ③水俣での単位互換
- ④大学院リサーチパーク

- 「実学」の意味は？ 「実学」は、学問として体系化されていない
「実学」は「学術」に対比しているもの。今回記載の「実学」は、全てを含めてしまっており、漠然としている。

言葉をそのまま安易に使ったが、「実践する学問」を意図している。

単なる座学ではなく、現場で理解して深められるフィールドがあるのが水俣の売り

専門職大学院についてもよく調べていない。

- 今分かっているのは、法科大学院、会計士のようなビジネススクールや地域マネジメントのような大学院もある。
例) 香川大学院地域マネジメント研究科

●「学会の誘致」

- ①学会を水俣につくる ②学会の研究大会の会場を提供する

①は日本の大学教育に欠けている問題解決型の学問。

→学会の開催は、地域持ち回りになることが多く、当初の目論見から外れる場合がある。

東大 大西先生によると現在研究者の関心は、震災被災地に向いている。

災害と公害は、共通点もあるし、学会もない。

→学会内から機運の醸成の盛り上がり期待し、長いスパンで考えていく

②は学会を水俣で多く開催してもらうことにより、多くの教授に来てもらえる。

●研究フィールドになるための素材

水俣の魅力にのっけは、研究フィールド →訪問先の先生方も興味ある

- ・もっと研究フィールドとして提供できるものを具体化する。
- ・愛林館等の資源は散分的である。
- ・4大公害地域の連携が弱い。
- ・研究者が、水俣に魅力を感じているものは何か。研究者のニーズをもう少し調べるべき。
- ・様々なプログラムに地元の人々も加わってもらい、大学も集まってもらって単位も取れるようにすることで、地域の評価も上がる。
- ・地域で提供できる資源を上手く組み合わせることが必要。
- ・大学のゼミなどが長期休暇となるので、それ以外の間に、JICA研修等を誘致することで、通年で水俣に人を呼び込む。
- ・水俣は知識だけでなく、実践的なプログラムを提供すべき。
- ・人頼みではなく、自分たちで研究フィールドを作り上げるにより、大学側から来てもらうようなものを作り上げることが大事。
- ・課題解決型大学院を造るのはどうか。そのためには、各円卓会議の連携が大事。
- ・企業研修として、水俣の資源を見てもらい、研修プログラムを検討してもらうというのはどうだろうか。外資系だと環境に関心が高い。
- ・国水研と熊本学園大学が活用できるのではないかな。
- ・自分の研究を実践する場を提供すれば先生は来る。

●地元学

- ・もっと売れるものである。もっと力を入れるべき。
- ・水俣の人が始めたので、水俣で「地元学学会」を設置し、研究大会も開催する可能性もある。
- ・JICAも地元学を受講するが、実践的なプログラムに達していない。
- ・研修のありかたも双方向性にすべき。

3 今後の活動方針

- ・第5回円卓会議（最終回）までに、出席可能な円卓会議メンバーが集まって作業部会を開催する。
- ・作業部会では、実践する学問の内容（教育内容）、研究フィールドとなるための素材（研究内容）を具体化し、（大学や研究者に対するセールスポイントの）仮説を設定する作業を行う。
- ・並行して、これまで意見を聞いてきた大学等や、関係のありそうな地元の市民等に対して、どのような素材があれば研究フィールドとして活用しようとするのか、地元でどのような素材を準備できそうなのか、円卓会議メンバーで手分けをしてニーズとシーズの確認を進める。

- 作業部会 1 (12月26日(月)午後) (→13:30～16:00 に決定)
- 作業部会 2 (1月11日(水)午前) (→ 9:00～11:00 に決定)
- 第5回円卓会議 (2月14日(火)16:00～18:00)

以上